広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	英語及び他の諸言語における否定表現〈卒論要旨〉
Author(s)	宮田, 芙美子
Citation	広大言語 , 5 : 67 - 68
Issue Date	1965-12-10
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046236
Right	
Relation	

英語及び他の諸言語における否定表現

宮　田　芙美子

1.　否定表現の歴史

ラテン語，仏語さらに英語にいたる否定表現をその歴史的見地からみると，最初否定副詞がまず弱まり，ついで不十分なため何らかの付加語によって強められる。この付加語が否定詞本体と感じられるようになるが，これも又弱まるという発達過程をたどっている。

2.　特殊否定とネクサス否定

否定表現は単一の明確な概念に係属するかあるいは二つの概念の結合に係属するかどちらかである。前者を特殊否定，後者をネクサス否定という。特殊否定とネクサス否定は原則的にその区別は明らかであるが，実際上はこの両者を区別することは必ずしも容易でない。又 She is not happyやIt is not possible to see it における両者の区別は重要ではない。

一般的傾向として可能な場合にはいつでも不クサス否定を用いようとする方向に向っている。例えば原則としてI come not to send peace , but a sword のような文章ではdoは用いられないがI do not complain of your words , but of the tone……。という文では否定詞は動詞に引きつけられdoが用いられる。その他否定詞が動詞に引きつけられる例として，We aren t here to talk nons nonsense, but to cut。 Can t she ever write berself ? You are not probadley aware…… 等が挙げられる。しかしこの傾向に抵抗する表現もある。

You will of course not meet him.

3.　否定の意味

言語的否定は一般的に言ってある辞項を論理学者の言う矛盾事項に変える。どんな言語でも矛盾事項を表わすのにunhappyやimpossible のような派生語かnot に相当する副詞を用いるのが普通であるが多くの言語は最も必要な反対辞項を表わすのにしばしば

young—old のような全然別の語を用いる。この場合 young—old の間に中間的段階が存在することが考えられる。

中間的段階
||
例えば all—something —nothing の all と nothing という絶対性を
〔much—a little—little〕
要素とする表現の否定を考えると① not+all→something（中間的段階）① "all +特殊否定→nothing ② ラテン語に於ける non+nihil→something の段階 ②' ラテン語に於ける nihil non videt→he sees everything.（all の段階）②'' nothing +特殊否定→all の段階以上の①，② の事実から絶対概念（all あるいは nothing ）の前に否定詞をおくことによって絶対性を否定した結果，中間辞項となるのである。

（文責　古川洋子））